

柳澤信夫, 柴崎 浩 (著)

臨床神経生理学

玉置哲也 (和歌山ろうさい病院長)

検査と疾患の双方向からアプローチが可能

「臨床医学を支える基礎学問領域のなかで、神経・筋疾患における生理学ほど臨床に直結した分野はない」と序文が書き出されています。この文節は、国内のみならず国際的にも高名なお二人、すなわち柳澤信夫先生、柴崎浩先生が出版された『臨床神経生理学』を貫く基本的理念を端的に示しています。

お二方のご経歴をみますと、柳澤信夫先生は、神経生理学者として、また米国の神経学の創始者としても高名な Denny Brown のもとに留学され、柴崎浩先生は神経学のメッカともいえる Queen's Square で視覚誘発電位を初めて記録した Halliday AM のもとで学ばれました。その後、柳澤先生は脊髄を中心とした運動系、柴崎先生は感覚系とそれを統合する高次脳機能を、それぞれの専門分野とされ、基礎的、臨床的研究に貢献してこられました。お二人は、わが国のみならず国際的にも高く評価されている臨床神経生理学者であり神経内科医であります。そのお二人が、得意分野を担当され、基礎的知識に始まり最新の研究成果までをまとめられた得難いテキストが本書であります。

20 世紀以降の驚くべき電子工学の発達に支えられた基礎ならびに臨床神経生理学の発達を概観した「序」に続き、「A 神経系の機能検索（総論）」の項では、神経生理学をさまざまな関連医学領域において欠くことのできない診療手段であると位置づけ、動的あるいは機能診断の手段としての臨床神経学の利点と限界、さらには将来展望が、時には端的に、かつ詳細に述べられています。特に、例えば増幅器の機能解説をも含む基礎事項の記述は、他に類をみないほど充実しているといってもよいでしょう。

「B 基本的検査法の理論と実際」は 19 の項目で構成されていますが、現在応用されている臨床神経生理学的検査法のほとんどすべてを網羅して、まず基礎的情報を記述し、その記録方法についての、理論

的、技術的根拠と実際の手技が詳細に述べられています。「I. 脳波と脳磁図」に始まり、「II. 臨床脳波の記録と判読」、「III. 筋電図」、「IV. 針筋電図」と続きますが、そこには従来の運動系、感覚系との区分にとらわれない、神経・筋系を一連の動的機能組織として総合的に捉えるという姿勢が示されているのではないかと考えます。

加えて随所に、コラム—例えば、「10 の脳波を読むよりも 1 つの脳波を記録したほうが勉強になる! (p.23)」、「脳波の判読は職人芸であるという言葉をしばしば耳にするが、果たしてそうであろうか (p.34)」、「われわれの意志は脳のどこで決定されるか (p.287)」、「オンディーヌの呪い (Ondine's curse) 症候群 (p.325)」などが配置され、読み物的興味も満たしてくれています。

また、本書は多色刷りで、その効果が最も発揮されているのは「XV. 高次脳機能の生理学的検査」、「XVI. 皮質律動波の解析」などの項で、機能的診断と各種画像的診断法の合成など、まさに先端的研究成果を、視覚的にも読者に理解しやすくしています。

最後の項「C 精神・神経・筋疾患の生理学的アプローチ」では、対象となる 14 の疾患群に対する臨床神経学的検査を駆使するための戦略が示され、疾患の基礎的記述と神経生理学的検査所見がその解釈とともにわかりやすく述べられています。初学者はこの項から始めて、方法論すなわち「B」項を開き当該検査法の基礎と実際を学ぶという利用の仕方もあるかもしれません。

以上詳しく述べてきたように、臨床神経生理学の方法を正常あるいは病的な人体に適用して動的な機能分析を行い、機能の解析、疾病の診断、治療を行うすべての分野の専門家に、まさに座右の書として本書をお薦めしたいと存じます。

(B5 判 448 頁 定価 9,500 円+税 2008 医学書院刊)